緑の夢を見ませんか?

山田太一

緑の夢を見ませんか？

一九八三年一〇月一〇日　第一刷発行

著　者　山田太一

発行者　大和岩雄

発行所　大和書房

東京都文京区関口一―三三―四

郵便番号　一一二

電話（二〇三）四五二一

振替　東京六―六四二二七

印刷所　信毎書籍印刷

製本所　ナショナル製本

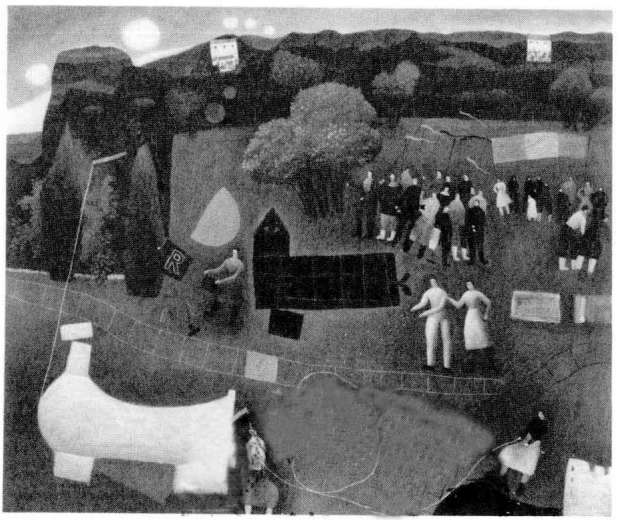
装　幀　落田謙一

©1983 T. YAMADA Printed in Japan

ISBN4-479-54013-X C0395

乱丁本・落丁本はお取替します

緑の夢を見ませんか?



山田太一

大和書房

緑の夢を見ませんか？

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

1

●**ペンション・階段**（白黒の画面で）

夜。暗い。フロントあたりの常夜灯で、おりてくる越谷弘子のスリッパの足が見える。
足、とまる。ネグリジェにガウンの弘子が一方を見て、ギクリとしている。
カッと頭に血がのぼり、唇を震わせ、ドドッと階段をかけおりると、夢中でフロント近くへ走り、よく場所の定かではないスイッチを短くさがして灯りをつけ、振りかえる。
一方を見て、へたへたと膝をつく。
ストップモーション。さわやかで甘い音楽流れて——。

●**緑の伊豆高原**（昼）

メイン・タイトル「緑の夢を見ませんか？」
美しいカラーである。

●**あるアパート**（白黒の画面で）

夜。ポール・デイビスのポスターが大きく貼られているような知的俗物大学生の部屋。
隅に積まれた蒲団へつき倒される渋沢妙子。
男、瞬時も休まず妙子のワンピースをひき裂くようにする。振りかえって抵抗しようとする妙子の上にのりかかる男。
歪む妙子の顔が、ストップモーションとなって——。

●**緑の伊豆高原**（昼）

カラー。クレジット・タイトル。

❹**あるアパートの前**（白黒の画面で）

昼。強雨。ずぶ濡れの谷川まゆみ。
その前を霊柩車へ棺がはこばれる。
傘を棺へさしかける人々。
まゆみ、感情溢れて、その棺へ走ってすがる。
ひきはなす男たち。
ストップモーション。

●**緑の伊豆高原**（昼）

カラー。クレジット・タイトル。

●**新宿の路地**（白黒の画面で）

夜。逃げるように表通りへ行こうとする長身の男の腕を後ろからひっぱって「ちょっと待ってよ」と真剣にひきとめる菊本美津江。

男、顔をそむけて振りきって行く。

「ちょっと」とまた美津江つかむが、振りきられる。

早足に立ち去る男に「ろくでなしッ！」と叫ぶ。

さっきから泣いてひきとめていた顔。

ストップモーション。

●**緑の伊豆高原**（昼）

美しいカラー。

クレジット・タイトル、終る。

●**環八**（昼）

現実音。東名高速道路入口へ向う外車。越谷安彦の車である。

●**車の中**

安彦「（運転しながら明るく優しく）お母さん」

弘子「（助手席。正面見ていて短く目を伏せる）」

静江「（後部座席。和服。真面目一方のまま死んだ男の真面目な妻。地道なところのない息子が、工作機械メーカーの社長だった夫の財産をどんどん失くしてしまうのを見続けて、息子に対しては笑顔を消し、目を合わさず文句をいうのが常態になっている）なに？」

安彦「（笑って）そんな声出さないで貰いたいな。折角、お母さんをおどろかそうと思ってるのに」

静江「おどろきたくなんか、ちっともないわねえ（と強く悲しくいい）これまで散々あなたには、おどろかされてるもの」

安彦「わかったよ（と苦笑、優しく明るい）」

静江「（尚続けて）今度こそ今度こそって、折角お父さんが立派にやっていた工場があるのに、やれ自動販売機だ、やれコンピューターのなんとかだ、やれアスレチックの道具だと、とうとう工場をのっとられてしまって、それでも今度こそォ今度こそォって、あなたの今度こそは聞き厭きてますよ（と吐き捨てるようにいう）」

安彦「（全く動じない、明るく）一言いうとすごいんだからな」

静江「当り前ですよ、散々とび歩いて帰って来ないで、急に帰ってくりゃあ、さあ車に乗れ、さあおどろかす事がある。なんだって聞いたって一人でニコニコして、何処行くかも、なに見せるかもいいやしない」
安彦「(明るく)分った分った(と笑って)まあそういわれても仕様がないけど、どうして今までこういう事を思いつかなかったのかって、不思議なくらいなんだなあ」
静江「そんな事ばっかりいってる」
安彦「でも、今度は本当にそうなんだ。ちょっと遅すぎたよなあ、お母さんにも弘子にも随分迷惑かけたけど、ぼくに向いているのは、こういう仕事なんだって、やっと分ったんだ」
弘子「――(目を伏せめにして動かない)」
安彦「(短く悲しみが走る。しかし、また明るく)きっと喜んで貰えると思うんだ」

●東名高速入口

車から見たゲイト。
安彦の声「(前シーンと直結で)あと、約二時間、伊豆だよ、行先は伊豆高原なんだ(音楽、スタートして)」

●伊豆スカイライン

走る車。車から見た風景。

●車の中

安彦「(運転しながら、スキャット風に明るくなにかをロずさみ、隣りの弘子をチラと見る)」
弘子「(笑顔なく目を伏せている)」
安彦「(気を励ますようにロずさむ)」
静江「――(涙を拭いている)」

●国道一三五号線

車から見た伊豆高原が近い標識、看板、樹々、モーテルなどのスケッチ。

●林の道

安彦の車、徐行しながら来て停る。
音楽終って、小鳥の声。

●車の中

安彦「(微笑で、目を伏せ)この辺で、おりて貰おうかな」
弘子「(安彦を見る、また裏切られるのではないかという思い。だって周りになにもないのだ)」
安彦「勿体つけたいんだよ(振りかえって静江に)そこ(車の先)曲ったところにあるんです。秘密にして(弘子に顔を戻し)ここまで漕ぎつけたんだ。あまり簡単に

見せたくないんだ（とドアをあけて外へ出、ドアを閉め後ろへ）」
弘子「――（その夫の方を見る）」
静江「まさか、別荘建てたんじゃないでしょうね（と悲しく独り言めいていう）」

●車の外

小鳥の声。後部トランクから車椅子を出す安彦。車から出る弘子、ドアを閉める。安彦、トランクの蓋閉める。

●林の道

車椅子に乗った静江。それを押す安彦。そのやや後ろの弘子。

安彦「（明るく）いいかな、この辺かな（とこのシーンの頭から、静江の視線に近く身体をかがめ、前方を伺いながら押して）もうちょい、もうちょい、もうちょい（と一人ではしゃいで車椅子を止め）お母さん、なんか見える？」
静江「見えませんよ（と不機嫌）」
安彦「（笑って弘子を振りかえり）ペンションをつくったんだよ」
弘子「ペンション？」
安彦「分りやすくいえば、小さなホテルっていうところかな（としゃがんで母に向っていう）」
静江「ホテル？」
安彦「（もう立ち上っていて）ホテルっていうとちょっと大げさすぎるんだ。でも、民宿というほど野暮じゃない。野暮どころか、いまから見て貰うけど、これでも随分考えたんだ。緑の中で、どんな家が似合うか？　冬木立になったら、どうか？　外国へ来たようだな。そんな事をちょっと思わせるような、綺麗なペンションをつくりたかった。どうです？　お母さん（としゃがみ）ぼくは、もともと、こういうものが好きだったんですよ。この年になって漸く気がつくなんて（と目を伏せ）多分親父のせいだね（立ち上り）親父が工作機械で成功したから、こっちも同じ方向で親父をのりこえてみたい。こだわってたんだな。もっと早く、こういう仕事をやればよかった。レストランとか、喫茶店とかスナックとか、ホテルとか、そういうものをやれば、ぼくは、こんなに二人に、迷惑をかけなくてもすんだのかもしれない」
静江「いいから見せて頂戴（とさえぎるようにいい、あまり冷たすぎると自制し、ややあたたかく）どんなものを、つくったの？（目は合せない）」
弘子「――（目を伏せている）」

●ペンション

車椅子を押す速度でカメラ前進し音楽と共に、林の中から姿を見せる緑と白の美しいペンション。

弘子「――（美しいという思い）」

静江「――（美しさは感じている）」

安彦「（目を伏せて、ゆっくり押している）」

三人とペンション。

次第に、ペンション全容を見せて三人、玄関の方へ回り込む。

回り込むロングショットに、カットインのように、弘子と静江、二人の見た目の窓とか外燈とか、門だとかテラスだとかが入れられ、音楽もゆっくり入る長さあって、車椅子、テラスの階段の下へ至る。

●階下

玄関のドアがあく。

音楽終って。車椅子を押して入って来る安彦。段落をのりこえ、カーペットの上にペンキ屋が敷いたらしいテント布地がある。その上に車椅子を上げる。

ダイニングあたりに、ペンキ屋の足場があり、隅にペンキの罐が並べられている。

弘子、入ってドアを閉める。

安彦、室内がよく見えるところまで車椅子を押して行き向きをかえて静江が室内を見やすいようにする。

安彦「（弘子が玄関で上らずにいるのを見て）いいんだ、そのまま（と微笑でいい）もっとも、これ片づけたら（とテント布地をちょっとめくって）この下はカーペットだから、そこで履き物は脱ぐことになるけど、あ、これにかけてくれ（と隅にあったダイニング用の椅子のひとつをとって、母の横へ置き）ペンキ屋、ほんとは昨日で終るはずだったんだけど、一日なんか他所をやるんだとかいってね。でも明日には終るんだ。いま、お湯沸かすからね（終始とまらず明るくいって、調理室の方へ消える）」

静江「――」

弘子「――（立ったまま）」

●二階・廊下

誰もいない。やや大げさな「よいしょ、よいしょ」と安彦の声。階段を上って来る音。安彦、静江をおぶって現われ、

安彦「二階はね（おぶい直し）二階はもう大体出来てるんだ。全部で十室（と上って来た弘子にいい）造りもまあ同じといっていいなあ（と一室のドアをあける）」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

●客室

安彦「ベッド二つに、これがソファベッドなんだ。これをエキストラにつかって一部屋三人、全部つめこめば、三十人泊れるんだ。どう？（と弘子を見て）いい趣味だろ？　あと屋根裏に一部屋。これは、アルバイトやとった時なんかに、寝かせればいいと思ってね」

●二階・廊下

安彦「どうですか？　お母さん。この山ン中にいちゃあ、ぼくもそうそう浮気も出来ないし」

弘子「（目を伏せる）」

安彦「（廊下の窓へ寄り）空気はいいし、身体は丈夫になるし、新規巻き直しが出来るような気がしたんだよ（明るくいっていて、語尾で急に泣くのを耐えるような声になる）」

弘子「（ハッと、その方を見る）」

安彦「（すぐ声を明るくし）この辺、他にこういうものないしね。別荘地帯だし、絶対成功すると思うんだ。有名なペンションになって、週刊誌にでものれば、お客断るのに大変なんじゃないかと思うんだ」

●階下・ダイニング

ペンキ屋の足場を隅へ寄せ、隅にあったテーブルを、やや中央近くに出し、紅茶をいれている弘子。

車椅子の静江。

椅子にかけ、クッキーの罐のテープをベリベリとはがしている安彦、蓋をあけ、

安彦「はい、クッキー（と、テーブルへ置き）なんだか、まだ、いろんなもの足りないし、全部揃ってから見せようと思ってたんだけど、我慢出来なくてね」

静江「――――」

安彦「来てもらったんだ」

弘子「――――」

安彦「まいったな（笑い）なにもいわないんだな。まだ、調理場も、お母さんの部屋も見せなくちゃいけないけど、どうかな？　感想、聞かせて貰いたいな」

弘子「――――」

安彦「どうかな？　お母さん（と笑顔をつくりながら、母の方は見ない）」

静江「女は、どうしたの？」

安彦「――――」

弘子「――――」

静江「半月の余も帰らないで、いきなり帰って来て、ワー

ワーせきたてて、いいだろう、いい家つくったろうって
——ごまかしてしまうつもりですか？」
安彦「——」
静江「弘子さんに、説明しなさい。女とは、どうなったか、話しなさい」
弘子「——」
安彦「別れたよ、本当なんだ。もう、女のことで、迷惑はかけない。今度は、本気なんだ。なにもかも、キチンとしたよ。もう——迷惑はかけない」
静江「(カッとなり)、何遍そんな事をいったか知れやしない」
弘子「——」
安彦「でも——今度は、本当に、本気なんだ。すまなかった。お母さんにも、本当に、すみませんでした」
静江「——」
弘子「——」
安彦「(もう一度、頭を下げる)」
弘子「いいかも知れないわね(と目を伏せたまま、明るくしようとする声でいう)」
安彦「(弘子を見られない)」
弘子「あなたには、本当に向いているかもしれないわ」
静江「——(まだ笑いはない)」
弘子「東京をはなれて(安彦を見て)あなたのいう通りだわ。ここでなら、やり直すこと出来るかも知れないわ」
安彦「(弘子を見られず)そう思ってるんだ」
弘子「素敵なペンションだわ。設計あなた？」
安彦「ああ」
弘子「なに風っていうのかしら？　昔のアメリカみたいな感じで」
安彦「ニューイングランド風とでもいうのかな。この(と立ち上り)階段の手すりを見て貰いたいな。こういう目につくところを凝ってみようと思ったんだ。予算ないからね。なんでも贅沢っていうわけにはいかない。諦めて節約したところも、あちこちあるんだけど、なるべく分らないようにしたつもりだよ。半分、楽しみながらやっているっていう印象が大事だと思うんだ。事実、そういうふうに出来ると思うんだ。うんと家庭的に。来た人を、人の別荘へ泊りに来たみたいな気持にさせたいんだ。楽しく、毎日、パーティでもするつもりで(母を見て、静江が横顔のまま悲し気なので絶句し)お母さんは、気に入らないかな？」
静江「あなたは、いくつになっても世間知らずです。客室が十もあったら、掃除をするだけだって、どんなに大変か知れやしない」
安彦「でも、いつも満員てわけじゃないし」
静江「他人がいつもいるのよ。鍵をしめても、中に他人が

いて、わが者顔にうろうろしているのよ」
安彦「分ってるさ」
静江「その人達の御飯をつくって、お風呂をたてて、出て行ったあと、ベッドの始末もしなけりゃならないのよ」
安彦「それが仕事じゃないですか」
静江「楽しみながらですって？　楽しみながら、そんな事が出来ると思ってるんですか？」
安彦「ぼくは人の相手が好きだからね。はじめはつらいかもしれないけど、余裕が出来れば、楽しんでだって出来ると思うんだ」
静江「二人で？　二人で三十人のお客と、こんな私の世話をして？」
安彦「だから、人をやとうさ。はじめは二人だよ。はじめからお客さん、そう来ないからね。だけど、来るようになったら人をやとうよ。そのために屋根裏に部屋をつくったっていったじゃないか（あくまでやさしい）」
静江「――（悲哀がある）」
安彦「どうすればいいの？　ここを売りはらって、なにをやれば、お母さんの気に入るかな」
静江「そんな事をいってるんじゃないの」
安彦「なに？」
静江「あなたは、本気じゃないの」
安彦「本気だよ」
静江「いいえ、本気じゃない。私には分るの。あなたは本気で此処で仕事をする気になっていないわ」
安彦「どうして？」
静江「私には分るの。弘子さんには分らない？」
弘子「いえ――」
静江「べらべらべらべら、しゃべりまくって、この人、本当は本気じゃないのよ！　そうでしょう？　そうでしょう！　安彦！」
安彦「（激しい剣幕に青ざめ、顔をそらす）」
弘子「（安彦を見ている）」
静江「本気じゃないのよ。本気で、ベッドをつくる気になっている？　本気でお客を楽しませる気になっていますか？」
安彦「（気弱く）なってるよ」
静江「嘘です。お母さんには分るの。分るのよ。お母さんには！」
安彦「（横を向いたまま青ざめている）」
弘子「（青ざめて安彦を見ている）」

●新宿・バーの多い情景（夜）

現実音。
弘子の声「美津江さん。自分の事ばかり書くのを許して下さい。でも、その日のことはなにからなにまで心にやき

ついていて、誰かに聞いて貰わずにはいられないのです」

●バー

美津江「(かなり酔っていて) いただきまァす (とグラスを一人の客のグラスにあて) いただきまァす。いただきまァす (と他の二人ほどの客のグラスにもあてる)」

弘子の声「美津江さん。お願いがあるんです。高校時代のクラスメートに、長い間御無沙汰していて、突然こんな手紙を書くのは、ほんとに勝手だと思いますけれど、あの頃、あなたは私の親友でした。その思い出にすがって、お便りしています。我儘ついでに、その日の事を、もう少し書かせて下さい」

●ペンション・静江の部屋 (昼)

静江がベッドに横になり、目を閉じている。

弘子の声「二時間余りの車に疲れて、姑(しゅうとめ)は横になりました」

●調理場

安彦「(フランス料理の準備をしている)」

弘子の声「主人は、夕食をひとりでつくるといって調理室に入りました。罪ほろぼしに、うんとおいしい物を御馳走するというのです」

●フロントのあたり

弘子、立って部屋をゆっくり見回す。

弘子の声「罪ほろぼしに、御馳走だなんて、なにをしたと思いますか? (感情溢れ) 何人の女のひとと——(絶句したまま立ちつくす間あって)——(振りかえって、フロントの背後のドアを見る)」

●静江の部屋

静江「(目をあけ、ドアの方を見る)」

弘子「(ドアをあけ) お呼びになりました? (と優しくいう)」

静江「(目を伏せ) ええ (と窓の方を見る)」

弘子「(ドアを閉め) なんでしょう?」

静江「——(窓の方を見たまま)」

弘子「(近づき) なんですか?」

静江「ほんとはね」

弘子「ええ——」

静江「呼ばなかったの」

弘子「あら」

静江「ううん。目がさめて、弘子さん何処にいるのかなって、思ったの」

弘子「(微笑する)」
静江「そしたら、ドアがあいたの」
弘子「テレパシーかしら？（と笑う）」
静江「情けないことね」
弘子「なにがですか？」
静江「他人のあなたに、こんなにお世話になって、息子にはテレパシーも通じやしない」
弘子「お母さんのお部屋、こんなに綺麗につくってあるじゃありませんか。それに私、他人じゃありません」
静江「他人よ」
弘子「いいえ――」
静江「他人（と淋しくいう）」
弘子「（苦笑して）普通、嫁を他人とはいいません（と、微笑）」
静江「（淋しく）私はね、あなたが、また安彦のせいで、ひどい目にあうのを見たくないの」
弘子「私、この仕事は、今までとはちがうような気がするんです」
静江「ほんとに、そう思う？」
弘子「思います。思いたいからかもしれませんけど――」
静江「どうかしているのかしら？　あの子が嘘をついているとしか思えないの。一生懸命やる。おいしい料理を出す。ロビーをいつも楽しくする。全部全部、嘘のような気がして仕様がないの」
弘子「（目を伏せ）いけませんわ」
静江「そうね。信用しなくちゃいけないわね」
弘子「ええ」
静江「でも、なんだか、あの子が嘘をついているとしか思えないの」
弘子「だったら、信用する振りをして下さい」

●調理場

安彦、ひとりで調理している。
弘子の声「（前シーンと直結で）折角、あんなに張り切っているんです」
静江の声「そうね、振りをしましょう。振りを――」

●表

薄汚れ疲れたまゆみが、妙に律義でそぐわないカバンを持って建物を見ている。
目を伏せ、カバンを重いという感じでほうり出し、もう一度建物を見る。

●ロビー

チャイム。調理場から、短く間あって、「はーい」と安彦の声。

●ドアの外

まゆみ、立っていて、一歩さがる。

●ロビー

安彦「(手を拭きながら来て)はい(と外に立つ人を見て、なんの用か分らず、あける)」
まゆみ「(目を伏せている)」
安彦「(ちょっと待つが)は?」
まゆみ「泊めて、貰える?」
弘子「(静江の部屋の方から現われる)」
安彦「(ちょっと微笑し)こりゃあおどろいたな。何処でお聞きになったか知らないけど、まだ出来上ってないんですよ」
まゆみ「――――」
弘子「(安彦の背後に立つ)」
安彦「来て下さったのは嬉しいけど、まだお泊めする状態じゃないし、消防署や保健所の許可も貰っていないし、商売出来ないんですよ」
まゆみ「(小さく、目を伏せたまま)そう」
安彦「すみません」
まゆみ「(ううん、というように首を振って、道の方へ)」
安彦「あの」
まゆみ「(立ち止る)」
安彦「参考までに伺っていいですか?」
まゆみ「(背を向けたまま)なに?」
安彦「何処で、このペンションのこと、聞きました?」
まゆみ「駅前のそば屋よ(とカバンを持って背を向け、はなれて行く)」
弘子「(小さく安彦に)あなた」
安彦「(振りかえって)うん?」
まゆみ「(立ち去って行く)」
弘子「いいのかしら?」
安彦「なにが?」
弘子「あの人、普通じゃないわ」
安彦「(まゆみの方を見る)」
まゆみ「(もう林の道を見えなくなるところ)」
弘子「普通の旅行だと思う? 帰しちゃっていいのかしら?」
安彦「まさか自殺もしないだろう(と言って微笑のまま家の中へ)」
弘子「(見送って、ハッとし)あなた、あの人を」
安彦「(振りかえり)うん?」
弘子「知ってるんじゃないでしょうね?」
安彦「(笑って)どうして? (と問題にせず中へ)」
弘子「(追って入り)あの人、あなたに逢いに来たんじゃ

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com